

ラルフ・フォックス覚書き：スペイン内戦に殉じた若きイギリスの文学者

川成, 洋 / Kawanari, Yo

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

509

(開始ページ / Start Page)

47

(終了ページ / End Page)

50

(発行年 / Year)

2001-04-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009027>

ラルフ・フォックス覚書き

——スペイン内戦に殉じた若きイギリスの文学者

川成 洋

ラルフ・フォックス（Ralph Fox）の名前を知ったのは、一枚のセピア色に変色した写真であった。

それは、スペイン内戦（1936～39年）期にマドリードの大きな円形の建物の壁に、レーニン、スターリンなどの名前が書き込まれた大型の垂れ幕の写真であった。この2人の共産主義者と並んで、ラルフ・フォックスの名前入り垂れ幕があった。となると、フォックスはこの2人の世界的に著名な革命家と比肩しうほどの人物だったのだろうか。

フォックスは、1900年3月、イギリス北部のハリファックスという人口9万くらいの工業都市の実業家の長男として生まれた。地元のヒース・グラマースクールを経て、オックスフォード大学に進学した。それもオックスフォードの中でも名門中の名門のモードリン・コレッジであった。フランス語と中国語を主専攻に選んだだけあって、在学中から外国語に関するセンスと翻訳の能力は抜群だったという。

大学在学中にロシア革命への列強による干渉を排除し、ソ連への援助を続ける「ロシア不干渉運動」の熱心な活動家となり、またイギリス共産党の創設メンバーの一員に加わった。大学を卒業した22年、ソ連の反体制派に対するモスクワ裁判を傍聴する。翌23年、ソ連の支援活動の一翼を担う「ロシア友好支援団」に加わり、南ロシアのサラマで農作業に従事する。いわゆる援農活動であった。やがてそれが認められ、コミンテルン極東支部の専従職員となり、中国に赴任する。29年にモスクワに戻り、マルクス・エンゲルス研究所の英語部門のライブラリアンとなる。

1930年にイギリスに帰国し、イギリス共産党中央委員に推挙される。弱冠30歳であった。

こうした八面六臂の多忙な政治活動のかたわら、『デイリー・ワーカー』紙、『左翼評論』誌、『ニュー・ライティング』誌などに寄稿し、すでに上梓した『青年船長』（1922年）や『草原の民』（1925年）、『嵐の空』（1928年）などに加えて、『レーニン伝』（1933年）などを出版し、左翼文壇で不動の地位を占めるようになった。

これ以降しばらくの間、フォックスの政治活動と文学活動の両輪が大きく回転していく。

1936年12月初旬、フォックスはスペイン内戦で共和国陣営の国際旅団の戦列で戦うためにスペインへ赴き、創設されたばかりの第14国際旅団フランス人（マルセエーズ）大隊イギリス人中隊付政治委員となる。政治委員の任務は、ソ連の赤軍にならった制度で、兵士の士気や政治意識を高め、

戦闘部隊として鉄の団結を維持することであった。

フォックスのすぐれた指導能力を見込んだ国際旅団総司令部は、彼に国際旅団の基地アルバセーテにとどまり、中隊での教育と訓練に専念するよう要請するが、結局、イギリス人中隊付政治委員として最前線に赴くことを自ら志願する。

1936年12月26日、アンダルシア一帯を制圧したフランコ叛乱軍のさらなる北進を阻止し、コルドバを奪回するために、ロペラ攻略作戦が強行された。イギリス人中隊の指揮官は、第一次大戦のイギリス陸軍将校、近衛連隊の将校を歴任したジョージ・ネイサンであった。先鋒部隊としてイギリス人中隊がオリーブの樹を遮蔽物としてロペラ村をへ進撃を開始した。白い家並みが肉眼ではっきり見える丘の頂上にたどり着いたとき、突如、ロペラ村の砦から敵の一斉射撃が始まった。事前に打ち合わせた味方の援護射撃も行われず、イギリス人中隊はのちに「イギリス人の丘」と呼ばれるようになった丘の裏斜面にまで後退を余儀なくされた。このように押し立てられる戦闘が2日間続いた。27日の夜から翌日払暁にかけて、イギリス人中隊は「イギリス人の丘」から大攻撃をしかけ、ロペラ村の外壁まで到達することができた。今回はフランス人大隊の主力が援護作戦に加わった。そうはいっても、にわか仕込みの共同作戦はうまくいかず、4時間ほどの死闘の末に、ネイサン中隊長は「イギリス人の丘」への退却を命じた。この作戦は完全に失敗した。多数の死傷者を出し、退却せざるをえなかった。しかも戦死者を戦場に遺棄したままの総退却であった。

この総攻撃に際して、フォックスはネイサンとともに最前線の指揮にあたっていた。敵陣へほぼ半分ほど接近したとき、フランコ叛乱軍の右翼陣地を掃射するために、味方の機関銃部隊が突撃するのを見た。すると、フォックスがその部隊を指揮するために、可能な限り身を低くしてその部隊の方に進んでいった。突如、敵のライフル攻撃が始まった。フォックスの姿は見えなくなった。彼の指揮を待ち受けていた機関銃部隊は前進するわけにはいかなかった。

その日夜遅くなって、一人の兵士が無人居地帯となったオリーブの林の中に匍匐して入り込み、戦死した兵士のポケットから国際旅団の身分証明書や手帳などをかき集めてきた。その中に、フォックスの手帳と彼宛ての手紙があった。

フォックスは戦死したのである。36歳であった。このおびただしい「墓標のない戦死者」の中に、ケンブリッジ大学トリニティ・コレッジの歴史学大学院生で、詩人のジョン・コーンフォード (John Cornford) も混じっていた。彼らの戦死は目撃されず、遺体も確認されなかった。コーンフォードが倒れたのは、27日夜、もしくは28日未明、すなわち21歳の誕生日、もしくはその翌朝であった。彼を最後に見た戦友によると、彼は撤退中の味方を援護していたという。

ところで、このロペラの戦闘は、まったく不可解なことに、ほかの戦線から孤立し、しかも多大な犠牲を強いられて失敗に帰したものの、共和国軍総司令部からは、「一日中進撃が続き、領土の損失はまったくなかった」⁽¹⁾という驚くべき戦勝声明が発表された。

この作戦が失敗した28日夕方、スターリンの変わらぬ信頼をえていたコミンテルン中央委員で、国際旅団総司令官のアンドレ・マルティ (Andre Marty, 1886 - 1956) は、フランス人大隊の指揮官ラサールをフランコ叛乱軍スパイ、具体的には、イタリア軍より金を受け取っていた、として告

(1) Thomas, Hugh. *The Spanish Civil War*, Penguin Books, 1991, p.435.

発した。臨時に設置された軍法会議でラサールは身の潔白を叫んだが、有罪となり、判決の20分後に銃殺刑に処せられた⁽²⁾。ラサールは指揮官としては臆病であっても、スパイでは決してなかったようである⁽³⁾。

フォックスの話に戻すと、その翌日、彼の戦死が公式に発表された。フランス人大隊は、彼の戦死を悼んで「ラルフ・フォックス大隊」と命名されたのである。

フォックスの戦死した翌年の1937年、今や彼の遺作となったマルクス主義文学理論書『民衆と小説』⁽⁴⁾など、3点が上梓された。この『民衆と小説』は、イギリス小説の現状と未来を展望し、「かつては小説の確たる土台と見えた基礎を破壊してしまった、思想的危機を理解する」⁽⁵⁾ためには、マルクス主義を通してのみ可能である。また、マルクス主義は個人主義と敵対するのではなく、個人に最も充実した価値を与えるばかりでなく、個人を社会的コンテキストの中で認識するのだと主張し、こう述べている。

「だから個人はいわば二重の歴史を持っている。彼は社会の歴史を担った人間、すなわち典型であると同時に、個人の歴史を持った一人の人間でもあるのだから。この両者がいかに鋭く衝突しても、後者が最終的には前者によって条件づけられる限り、両者は一つであり統一体である。もっとも、だからといって芸術にあつては、社会的典型が一人ひとりの個性を必ず支配することを意味しないし、意味すべきでもない。フォルスタッフ、ドン・キホーテ、トム・ジョーンズ、ジュリアン・ソレル、シャルリュはすべて典型であるが、社会的特徴がいつも個人的特徴を露呈する典型である。そして逆に、彼らの個人的希望、渴望、愛、嫉妬、野心もまた、社会的背景を照らし出す⁽⁶⁾」

さらに、ラブレールとセルバンテスの現実への姿勢を論ずることで、文学の任務を説得力のあるものにしている。

「今日の文学の革命的課題は、文学の偉大な伝統を回復し、主観主義と狭い専門化の枠を破ることであり、また、真理つまり現実についての知識を獲得するという唯一重要な課題に、作家を直面させることである。芸術とは人間が現実と格闘しそれを同化する一手段である⁽⁷⁾」

たしかに今日の視点からすれば、フォックスの作家、文芸評論家としての限界はある程度指摘せざるをえないかもしれないが、しかし彼の「行動的理想主義者」としてのひたむきな生き方は、いかなる賢しな批判をも越えて胸を打つであろう。

(2) Levine, Maurice. *Cheetham to Cordova: A Manchester Man of the Thirties*, N. Richardson, 1987, p.91.

(3) Thomas, op. cit., p.430. Johnston, Verle. *Legions of Babel: The International Brigades in the Spanish Civil War*, Pennsylvania State University Press, 1994, p.68. Broue, Pierre & Temine, Emil. *La Revolution et la guerre of Espagne*, Les Edition de Minuit, 1970, pp.379-80.

(4) Fox, Ralph. *The Novel and the People*, Lawrene and Wishart, 1937.

(5) Fox, op. cit., p.19.

(6) Ibid., p.34.

(7) Ibid., p.37.

また、同じく1937年に刊行された追悼集『ラルフ・フォックス——武器を取る作家』⁽⁸⁾（ジョン・リーマン、C.デイ・ルイス編）では、詩人のスティーブン・スペンダーが「われわれ全ての者にとって見本とすべき人」⁽⁹⁾と称え、C.デイ・ルイスは「彼の著作には、ファシズムと戦い、自由のために死すとも可なりといった意識と剛毅さがみなぎっている」⁽¹⁰⁾と指摘している。もっとも、この本の「序文」に、イギリス共産党書記長ハリー・ポリットの「外国のために死んだ点で、フォックスの先達はバイロンである」⁽¹¹⁾といったまことに凡庸な主張も見受けられるが。

1950年4月、「ラルフ・フォックス追悼記念委員会」は、彼の生まれ故郷ハリファックスに、記念碑の除幕式を行った。ついで、1979年、第15国際旅団イギリス人大隊の最後の大隊長、サム・ワイルドによって、現在の記念碑が再除幕された。それ以来、毎年ハリファックスでは「ラルフ・フォックス記念講演会」が催されるようになった。講師の中には、多くの著名な文学者や政治家と並んで、今世紀イギリスが生んだ高名な社会主義者、G.D.H.コールも名を連ねていた。

また、現在、ハリファックスの中央公園に、彼の名前入りのプレートのベンチがある。そのプレートには、「ラルフ・フォックス、作家。自由のための人民兵士の友人」と刻まれている。

そして、2000年3月3日、コーンフォードやフォックスなどイギリス義勇兵が初陣し、多大な戦死者を出したロペラ村（現在は「町」になっている）で、町議会と町民の総意に基づいて、彼らの慰霊碑が建立された。その碑には、“LOS ESCRITORES Y BRIGADISTAS INGLESIS, R.W.FOX Y R.J.CORNFORD”⁽¹²⁾と刻まれている。

フォックスは、たしかに内戦期のマドリードの垂れ幕のように、レーニンやスターリンほどの「大革命家」ではなかったが、後世の人の心を動かさずにおかない「草莽の指導者」であったのである。

（かわなり・よう 法政大学工学部教授）

(8) Lehmann, John & Day Lewis, C.eds. *Ralph Fox : A Writer in Arms*, Lawrence and Wishart, 1937.

(9) Lehmann, op. cit., p.32.

(10) Ibid., p.40.

(11) Ibid., p.iii.

(12) *News Letter of International Brigade Association*, Jan. 2000, pp.2-3.